古フランス語におけるCVS語順の平叙文の名詞主語と人称代名詞主語について
— 13世紀散文作品 *La Queste del Saint Graal* を資料として —

今 田 良 信

0. はじめに

古フランス語では，何らかの理由で主語が動詞の後に来る場合，その頻度の表し方は研究者によりいろいろであるが，主語が人称代名詞の時は，かなり高い頻度で省略される旨の記述が一般的になされている[1)]。

例えば，RAYNAUD DE LAGE(1975)[2)] は，

> 主語は動詞の後にあると仮定される場合，極めて頻繁に省略される。特に主語が人称代名詞である時には，主文においても，疑問文においてさえも，省略される〔…〕。
>
> D'iluec vit en la chambre entrer le chevalier, (Chastelaine, 392-3)
>
> ＝ de là il vit le chevalier entrer dans la chambre

と述べている。また，MENARD(1976)[3)] は，

> 文頭の直接または間接〔目的〕補語，状況補語，副詞は，「主語の倒置」を引き起こす。その主語が人称代名詞の時は省略される。
>
> Bien fu armez Guillelmes. (*Prise d'Orange*, 987)
>
> ＝ Guillaume était bien armé (主語の倒置)
>
> Aprés mengier se departirent. (*Perceval*, 1923)
>
> ＝ Ils se séparèrent après le repas (主語 il の省略)

としている。興味深いのは，MENARD(1988)[4)]〔1976年版の改訂増補版〕では，

同じ箇所の説明が，

〔…〕その主語が人称代名詞の時はしばしば〔下線部筆者〕省略される。

と訂正されている点である。1語の挿入がもたらす2つの記述の意味するところの違いはかなり大きい。前者では100 %省略されることになるのに対し，後者では省略される程度はかなり下がることになり，しかも，受け取り方により，その程度に上下の幅が出てくることにもなって，全体として漠然としたものになる。そして，まさにこの点が，筆者が疑問に思っている問題の所在と密接に関わってくるのである。

いずれにせよ，これらの説明に従えば，主語と動詞が倒置される場合，動詞の後の人称代名詞の主語は，上は100 %から下はかなりの幅をもって省略されることになる。しかし，筆者が実際に古フランス語のテクストに当たってみると，主語が省略される頻度が低くないことは分かるが，省略されていない事例も散見される。

Q.G..[32/19][5] Ce vos dirai je bien.

Q.G..[45/22] Et einsi fus tu deceuz par entendement;

M.A.[14/24][6] car autrement seroit il desloiax,

M.A.[36/85] car adonques serions nos a repos,

Q.G. [187/19] Et ce rescousistes vos;

M.A.[87/6] ; por ceste chose ne tornerent il onques vers lui,

また，テクストにより省略の状況に差があることも，漠然とではあるが，感じられた。さらに調べてみると，BONNARD & REGNIER(1989) には[7]，MOIGNET(1965)[8] による指摘として，次のような個別の作品ごとの具体的な記述も見られた。

G. MOIGNET(1965) の調査によれば，『ロランの歌』では，2200から2704までの500行ほどについて，人称代名詞主語は，文の第1位の場所が補語に

よって占められている場合の98%近くで欠けている。ヴィルアルドゥアン〔の『コンスタンティノープルの征服』〕では，252節から299節において，同様の場合に，人称代名詞主語は，全く用いられていない。一方，より民衆的な言語で書かれた同時代（1200年頃）のロベール・ドゥ・クラリ〔の『コンスタンティノープルの征服』〕では全体の35%の場合に，また，1230年に遡る『アーサー王の死』では2分の1の場合に，人称代名詞主語が現れている。

この指摘から分かることは，テクストの種類，文体，言語レベル等により，省略の状況が異なるということである。そこで，筆者には，省略される事例と省略されない事例の比率が具体的にどうなっているのかという疑問と同時に，それをできるだけ明示的で実証的に調べるにはどうしたら良いのかという疑問が湧いた。

筆者は，これまで一連の論考[9]ならびに拙著(2002c)[10]の中で，古フランス語の特徴とされる動詞第2位文[11]のうち，CVS[12]からCSVへの語順変化を手掛かりとして，語順の体系と変化の問題を扱った。そこで，本稿では，その際の考察の枠組みも少し利用して，この現象を実証的に検証してみたいと思う。

その前にこの現象を扱うに当たっての問題点と考え方，本稿の目的，および資料について，もう少し詳しく述べておこう。

1. 問題点の考え方および本稿の目的

この問題の根底には，省略されて消えているものに対して，そもそもなぜそれが「動詞の後」にあり，しかも「人称代名詞である時」と言い得るのか，という疑問がある。多くの文法書で従来から言われている，省略されるか否かを分けるこの基準への疑問に関して，説明しておく必要があろう。

先ず，「動詞の後」という条件に関して，それを反証するものとしては，語であれ，句であれ，節であれ，文頭に立った全く同一のCに対して，後続にVS / SV両語順が現れる（すなわち，語順のゆれが見られる）事例や，SV語順のみが現れるCの事例を挙げることができる。こういうCの場合，主語が省略されていても，前者については，それが動詞の後にあったとは必ずしも言えないし，後

者については，決して言えないからである。例えば，次の例を見られたい。

(1) M.A. [16/63] Meintenant se part Lancelos de leanz ...

(2) M.A. [93/27] et meintenant messire Gauvains se part de court et ...

同じ meintenant が文頭に立ちながら，主語は，(1) では動詞の後に，(2) では動詞の前に来ている。このような C が文頭に来る時には，たとえ主語が省略されていても，その位置が動詞の後であるとは言えないはずである。また，次のような事例もある。

(3) M.A. [10/1] L'endemain, quant il fu jorz, vindrent a un chastel ou li rois avoit jeü la nuit, ...

この例において，動詞 vindrent の主語（Lancelos et ses escuiers ないし il(pl.) と考えられる）が省略されているのは，動詞の後であろうか，前であろうか。筆者は，動詞の後ろであるとは断言できないと考える。なぜなら，同様の環境に置かれた次のような実例があるからである。

(4) M.A. [89/14] A l'endemain, quant li jorz parut, dist messire Gauvains a Lancelot: ...

(5) M.A. [89/1] Au soir, quant il fu tens de couchier, Lancelos se parti de leanz a grant compaignie de chevaliers;

これらの事例を見る限り，例 (3) と同様の環境にありながら，主語は，(4) では動詞の後に，(5) では動詞の前に来ており，動詞の後でも前でも現れる可能性があることを示している。従って，例 (3) の主語は，必ずしも動詞の後で省略されているとは言えないのではないかということである。それでも，こう反論する人があるかもしれない。(4) は，主語が名詞句だから省略されていないのであって，もし人称代名詞であれば，(3) のように省略されるのであると。ここで次の「人称代名詞である時」という条件に移る。この条件は，省略された主語の前後

の脈絡からそのように考えられ得るのかもしれないが，しかしそれでも，上のような反論に対しては，「0. はじめに」のところで示したように，「動詞の後」と「人称代名詞である時」の2条件を両方とも満たしているにも拘らず，主語が省略されていない事例が少なからず存在している点を指摘できよう。2つの条件を満たしても，主語が100％省略されるというわけではないことは，実例が示す通り確かである[13)]。

さらに，quant ~ のような状況補語節（従属節）が，単独で文頭に来る複文の場合，筆者の知る限り，主語が名詞であれ人称代名詞であれ，主節はSV語順しか取らない。この場合にも主節の主語が省略される場合は少なくないが，現れる時には動詞の前の位置にしか現れない主語が，省略されたからといって，どうしてその時だけ動詞の後であると言えるのであろうか。

さらに，村上(1977)によれば，本稿で扱う問題とは異なるが，次のような指摘がなされている。

> S.〔＝主語〕が省略されている場合，— これは古仏語には非常に多い — それがどの位置に省略されているかは永久にわからない問題であり，この種の例文は統計上省かざるを得ないであろう。

この見解は，傾聴に値する至極妥当なものであると筆者は考える。

また，MOIGNET(1965)は，Cが文頭に立つすべての（すなわち，CVおよびCVS語順の）事例を対象にしているようであるが14)，前述のように，CVの事例についてはSが本当に「動詞の後」にあると言い得るか怪しいものが少なからず含まれることになるし，「人称代名詞である時」という条件については，どの例についても決定的な決め手は無いように見える。

以上の理由から，筆者は，MOIGNET(1965)とは視点を変え，明示的に「動詞の後」と「人称代名詞である時」という2つの条件を両方とも満たしているのに，省略されていない主語が，名詞主語に対してどういう比率になっているのかを調べてみたい。そこで本稿では，S, V, Cがすべて明示されている平叙文のうち，CVS語順を取るもの，すなわち文頭にCが立ち，後続のSとVが倒置されている事例のみを対象とし，その主語が名詞であるか人称代名詞であるか，人称代名

詞の場合人称・数の分布はどうなっているか，さらにCの位階や機能の別による分布の偏りは無いか，などについて，資料体を限定して，具体的な比率を調べることを目的とする。

2. 資料について

資料については，上述のMOIGNET(1965)で指摘のあった資料も，もう少し詳しく分析してみる必要はあろうが，それは別稿に譲りたい。今回は，韻律や作詩法上の制約を被らない散文の中で，13世紀前半（1220～1225）のものとされる下記の文学作品を対象としたい。

La Queste del Saint Graal, Roman du XIIIe siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris: Honoré Champion, 1980.

3. 用例収集の結果

上述の資料から収集した用例全体をまとめたものが〔表1〕である。表の見方について説明しておく。縦軸の区分は，文頭に来るCを，その位階[15]と機能[16]によりタイプ分けしたものである。例えば，C[MOT]ODVSとは，語の位階に属する直接目的補語が文頭に来て，後続語順がVSとなっている事例のタイプ，C[SYN][PROP] C VSとは，句の位階に関係節や同格節などが付属している状況補語が文頭に来て，後続語順がVSとなっている事例のタイプということになる。横軸の区分は，文頭のCにより倒置されて「動詞の後」にありながら，省略されていないSを品詞別に区分してある。「その他」には，名詞（句），人称代名詞以外のものが全て（例えば，不定代名詞，指示代名詞など）が含まれている。さらに，〔表1〕の「人称代名詞」について，それを人称・数について下位区分したものが〔表2〕である。

〔表1〕

位階／機能による	省略されていないS			合　計
文頭のCのタイプ	名詞（句）	人称代名詞	その他	
C[MOT]$_{oD}$VS	5(16.1%)	21(67.7%)	5(16.1%)	31(100%)
C[MOT][PROP]$_{oD}$VS	0(0 %)	1(100 %)	0(0 %)	1(100%)
C[MOT]$_{c}$ VS	280(62.8%)	120(26.9%)	46(10.3%)	446(100%)
C[SYN]$_{oD}$VS	11(44.0%)	13(52.0%)	1(4.0%)	25(100%)
C[SYN][PROP]$_{oD}$VS	1(25.0%)	3(75.0%)	0(0 %)	4(100%)
C[SYN]$_{oI}$VS	1(50.0%)	1(50.0%)	0(0 %)	2(100%)
C[SYN]$_{c}$ VS	131(42.7%)	150(48.9%)	26(8.5%)	307(100%)
C[SYN][PROP]$_{c}$ VS	17(32.7%)	30(57.7%)	5(9.6%)	52(100%)
C[PROP] $_{c}$ VS	18(30.0%)	41(68.3%)	1(1.7%)	60(100%)
合　計	464(50.0%)	380(40.9%)	84(9.1%)	928(100%)

〔表2〕

文頭のCのタイプ	je(ge)	tu	il/ele	nos	vos	il/eles	合計
C[MOT]$_{oD}$VS	8	0	6	2	5	0	21
C[MOT][PROP]$_{oD}$VS	0	0	1	0	0	0	1
C[MOT]$_{c}$ VS	45	15	38	7	9	6	120
C[SYN]$_{oD}$VS	9	0	1	1	2	0	13
C[SYN][PROP]$_{oD}$VS	1	0	1	1	0	0	3
C[SYN]$_{oI}$VS	0	0	1	0	0	0	1
C[SYN]$_{c}$ VS	36	18	60	9	14	13	150
C[SYN][PROP]$_{c}$ VS	6	6	12	4	0	2	30
C[PROP] $_{c}$ VS	9	4	22	1	3	2	41
合　計	114 (12.3%) [30.0%]	43 (4.6%) [11.3%]	142 (15.3%) [37.4%]	25 (2.7%) [6.6%]	33 (3.6%) [8.9%]	23 (2.5%) [6.1%]	380 (40.9%) [100 %]

4. 分析と結論

〔表1〕からは，次の点が指摘できよう。先ず，名詞主語と人称代名詞主語の比率であるが，S, V, C がすべて明示されている CVS 語順の文の総用例数は 928 例であった。そのうち名詞主語の事例は，ちょうど 50％の 464 例である。これに対して，主語が人称代名詞でありながら省略されていない事例は 380 例で，全体の 4 割を超える 40.9％に上った。省略されない事例は，主語が名詞（句）のものより約 9％少ないだけである。従って，この〔表1〕を見る限り，多くの文法書に見られる「大部分は，非常にしばしば，非常に頻繁に（省略される）」と

いう表現は[17]，少なくともこの資料体に関しては，あまり正確とは言えないような数字を示していることになろう。

さらに，C の位階や機能の別による分布に関しては，タイプ別用例総数が 10 例未満のものを除くと，名詞（句）の主語の割合が最も多かったのは，C[MOT]C VS のタイプで，このタイプの全用例 446 例中名詞主語の割合は全体の 62.8％を占める 280 例であった。一方，人称代名詞主語の割合が最も多かったのは，C[PROP] C VS タイプで，このタイプの全用例 60 例中人称代名詞主語の割合は全体の 68.3％を占める 41 例であった。また，C[MOT]ODVS のタイプも 2 番目に多く，このタイプの全用例 31 例中人称代名詞主語の割合は全体の 67.7％を占める 21 例であった。

また，表には挙がっていないが，文頭に来る C の個別の語，句，節の別により，100 ％名詞主語のものや 100％人称代名詞主語のものがあることも判明した。これは，それらの各項目が用いられる種々の文法的環境とも関わっているように思われる。もう少し細かい分析をすれば興味深いと思われるが，紙幅の都合もあるので，稿を改めたい。

次に，〔表 2〕からは，次の点が指摘できよう。人称代名詞の人称・数の分布については，省略されていない人称代名詞主語の用例総数 380 例中，最も多かったのは，3 人称単数の 142 例で全体の 37.4％であった。次に多かったのが 1 人称単数の 114 例で全体の 30.0％であった。この両者で全体の 7 割近くを占めることになる。残りは，2 人称単数が 43 例で 11.3％，2 人称複数が 33 例で 8.9 ％，1 人称複数が 25 例で 2.7 ％，3 人称複数が 23 例で 2.5 ％と続いている。

5. 今後の課題

以上，S, V, C がすべて明示されている平叙文のうち，CVS 語順の事例を対象として，従来から基準とされてきた，「動詞の後」と「人称代名詞である時」という 2 つの条件を満たしながら，省略されない主語の割合を，限られた資料からではあるが，数量的に調査してみた。まだはっきりとしたことは言えないが，少なくとも，この件に関して多くの文法書に当然のように類似の表現で記述されていることが，必ずしもそのまま鵜呑みにはできないという証拠は示すことができたと考える。しかし，資料体の範囲も狭く，今後この範囲を広げて行く必要

があろう。今回は扱わなかったが，La Mort le Roi Artu についても，本稿で取った方法で調査・分析し，MOIGNET(1965) の結果と比べてみれば，興味深いものと思われる。

注

1) 本稿で引用した箇所以外には，BURIDANT(2000), p. 746; FOULET(1980), p. 313 (§457); JOLY(1998), p. 290; MOIGNET(1979), p. 357 など。頻度の表現については，"dans la plupart des cas"(JOLY), "facilement"(FOULET), "le plus souvent" (BURIDANT), "souvent"(MENARD), "très souvent"(FOULET), "très fréquemment" (RAYNAUD DE LAGE, MOIGNET) など様々。

2) 同書，p. 149。なお，引用箇所の訳は，同書の大高順雄訳(『古フランス語入門』, 朝日出版社，1981）に依った。

3) 同書，pp. 52-53。

4) 同書，pp. 52-53。

5) *La Queste del Saint Graal*, Roman du XIIIe siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris, Honoré Champion, 1980 の 93 ページ／28 行を示す。以下同様。

6) *La Mort le Roi Artu*, Roman du XIIIe siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève/Paris, Droz/ Minard, 1964 の 11 節／4 行を示す。以下同様。

7) 同書，pp. 46-47。

8) 同書，p. 93。

9) 参考文献欄を参照。

10) 参考文献欄を参照。

11) 古フランス語における文の主要な構成要素の順序（ordre des constituants），すなわち主語（S: sujet）・動詞（V: verbe）・補語（C: complément）によるいわゆる基本語順(ordre fondamental des mots)は SVC であるとされる。この SVC と，C が文頭に立つ場合に取られる CVS という 2 つの語順が最も頻繁な語順であるが，これらはいずれも文の第 2 位に動詞があることから動詞第 2 位文 (phrase à verbe médian) と呼ばれ，これが古フランス語の語順の特徴とされている。

12) 注 11) を参照。

[13] MENARD(1988) が,「しばしば (souvent) 」という語を挿入したのも,その点に気づいたからであると思われる。

[14] MOIGNET(1965), p. 93 の「文の第 1 位の場所が補語によって占められている場合の ...」という箇所から,そのように考えられる。

[15] ここでいう位階とは, M.A.K. Halliday などを中心とする体系文法 (systematic grammar) の用語の rank の意味である。『現代言語学辞典』(成美堂, 1988) によれば,「文法の諸単位は異なる大きさをもつ形式的項目であるが, その諸単位は大きさという尺度に従って配列される. それぞれの単位は階層 (hierarchy) をなす. これら単位間の関係を位階という.」とある。英語の最も基本的な単位を大きい方から順に挙げれば, 文 (sentence) >節 (clause) >群 (group = 句 (phrase)) >語 (word) >形態素 (morpheme) となる。フランス語であれば, 文 (phrase) >節 (proposition) >句 (syntagme) >語 (mot) >形態素 (morphème) である。

[16] 機能とは,具体的には,直接目的補語 (C_{OD}: complément d'objet direct), 間接目的補語 (C_{OI}: complément d'objet indirect), 状況補語 (C_C: complément circonstanciel) の 3 つの機能を指す。

[17] 注 1) を参照。

参考文献

BONNARD, Henri & Claude REGNIER, «*Petite grammaire de l'ancien français* », Paris, Magnard, 1989.

BURIDANT, Claude, «*Grammaire nouvelle de l'ancien français* », Paris, SEDES, 2000.

FOULET, Lucien, «*Petite syntaxe de l'ancien français* », 3e éd. revue, Paris, Champion, 1980.

今田良信「古フランス語における文頭の補語要素と語順 — CVS 語順対 CSV 語順を基準として —」,『ニダバ』, 22, 1993, pp. 80-92.

今田良信「古フランス語における文頭に従属節を有する複文の語順について」,『吉川守先生御退官記念言語学論文集』, 溪水社, 1995, pp. 31-45.

今田良信「古フランス語における文頭の補語と語順」,『ロマンス語研究』, 29, 1996, pp. 68-82.

IMADA, Yoshinobu, «La distinction affirmation/négation dans la phrase et l'ordre des mots en ancien français — Sur le rapport entre certains compléments circonstanciels en tête de phrase et l'ordre CVS/CSV — » in *Studia Romanica*, 30, 1997, pp. 9-16.

今田良信「古フランス語における文の肯定／否定と語順 — 文頭に現れる若干の状況補語（句）と CVS ／ CSV 語順との関係について — 」,『新村猛先生追悼論文集』, フランス図書 , 1998, pp. 205-210.

今田良信「古フランス語における語順解明のために — 13 世紀散文作品 *La Mort le Roi Artu* による資料体作成 — 」,『広島大学大学院文学研究科論集』, 第 61 巻 , 特輯号 4, 2001a, 72p.

今田良信「古フランス語における語順研究 — 13 世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 — 」（広島大学文学研究科提出学位請求論文）, 2001b, 421p.

今田良信「古フランス語における肯定／否定と CVS ／ CSV 語順 — 文頭に立つ文の肯定／否定に関わる若干の状況補語（句）と統語環境 — 」,『古浦敏生先生御退官記念言語学論集』, 溪水社 , 2002a, pp. 75-89.

今田良信「古フランス語における語順変化の研究のために — 13 世紀散文作品 La Vie de Saint Eustace による資料体作成 — 」,『ニダバ』, 31, 2002b, pp. 1-10.

今田良信『古フランス語における語順研究 — 13 世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 — 』, 溪水社 , 2002c, 409p.

JOLY, Geneviève, *Précis d'ancien français*, Paris, Armand Colin, 1998.

MENARD, Philippe, *Manuel du français du moyen âge: 1.Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, SOBODI, 1976.

MENARD, Philippe, *Syntaxe de l'ancien français*, 3e éd. revue et augmentée, Bordeaux, Bière, 1988.

MOIGNET, Gérard, *Le pronom personnel français: Essai de psycho-systématique historique*, Paris, Klincksieck, 1965.

MOIGNET, Gérard, *Grammaire de l'ancien français*, 2e éd., Paris, Klincksieck, 1979.

村上勝也「主格関係代名詞節における古仏語の語順 — S. C. V. 構文の種々相 — 」,『広島文教女子大学研究紀要』, 12, 1977, pp. 49-58

Sur le nom sujet et le pronom personnel sujet exprimé dans la phrase énonciative d'ordre CVS en ancien français
— à partir d'un document en prose du XIIIe siècle : *La Queste del Saint Graal* —

Yoshinobu IMADA

Il est admis qu'en ancien français, le sujet, qui serait placé après le verbe, est généralement omis dans le cas d'un pronom personnel, bien que les chercheurs emploient une locution adverbiale de fréquence propre à chacun d'eux pour noter ce phénomène: ex. "dans la plupart des cas"(JOLY), "facilement"(FOULET), "le plus souvent"(BURIDANT), "souvent"(MENARD), "très fréquemment"(RAYNAUD DE LAGE, MOIGNET)", "très souvent"(FOULET). Selon ce même principe, le pronom personnel sujet, inversé du fait de la présence en tête de phrase d'un complément d'objet direct ou indirect, d'un complément circonstanciel, etc., devrait lui aussi naturellement et de façon aussi fréquente être sous-entendu. Or, en réalité, les cas contraires ne sont pas rares dans les textes en ancien français.

Dans cette étude, nous nous sommes attaché à définir le rapport existant entre les noms sujets et les pronoms personnels sujets exprimés, postposés au verbe, à partir d'un document en prose du XIIIe siècle: *La Queste del Saint Graal.* Après le dépouillement du texte entier, nous avons dressé la liste exhaustive des exemples de ce type. Nos principales constatations sont les suivantes:

(1) Pour l'ensemble des exemples(928), la proportion (et le nombre exact) de noms sujets, de pronoms personnels sujets exprimés et des autres cas, placés après le verbe, est respectivement de 50.0%(464), 40.9%(380) et 9.1%(84).

(2) La proportion (et le nombre exact) de pronoms personnels sujets, distinction faite de la personne et le nombre, s'établit comme suit pour l'ensemble des cas(380): *je*(*ge*) 30.0%(114), *tu* 11.3%(43), *il*/*ele* 37.4%(142), *nos* 6.6%(25), *vos* 8.9%(33), *il*/*eles* 6.1%(23).